書紙左衛門尉本信

任

No. 47

へ13
3145
4

五

青砥藤綱摸稜案巻之五

東都　曲亭馬琴編述

根深機白が奸計鍾馗申次夫婦を陷し事

肥後の菊池家の退糧人に。廣木申次といふものありけり。武藝文道をもしらざれど。ゑがけなるにあらねど。幼稚きより畫を好みて。唐宋諸名家の筆意を寫し。自然とその妙要を得て傳神をよくしたり。就中黄筌が鍾馗の圖を深重して年来摸写すること数千幅に及びしかば。縁の皮骨をうつしよりて人皆彼を稱して廣木といふを。鍾馗申次と喚びにけり。つ此とれ菊池家は元祖大夫將監則隆より十代武房（能隆の孫。隆泰の子なり。一書に武房を康成に作る）の世にありしほどは武房は武名異國にまで聞えたる猛将なりとおもはれしが。繪をなどの賞翫せられしが。申次はいとおのづからかく原是譜代相傳の主なれも

へ13
3145
4

めくねふ五斗米の為に覊れて生涯區區として終々くんより。下さび華洛へ
逃げて。画をりて一家をなりとべーとて主君の身の暇をもらしまるり。女房
年青。女児小匙汝携て菊池郡隈府の城を退去つ。ゆゑて華洛へ赴くに
ろうれども大声八里耳に入ぐ。彼申分が画の元さる風韻いとあるれば却世俗
賞翫せず。里巷の俗画あざも及ばずとのまえおぼれて生活とうるぐらも
めふぐ。維う駿馬の骨を買んげふ画がもるりのいるれ世ごろ。とり八管よ憤れ
ども。進退こまふ窮りて。又せんとべもるるれまくに些ばりの由縁を伝めてふ。
妻と女児を携乃平城に投て赴てぐ。伝めてうるくぶふも。近ごろ身まりのと
ゆえーぐいうぐ。ゆるくうを失ひ。平城の客居根深由八とらふりの二階屋一室を
借て。親子三人くふち。時しもめれ。女児小匙。心持例るふぐちち風ろう。湖熟
往来して。夜八孩文ふ抱ひくて。睡ればいくく。魘まるどとこの小匙へ今年

ろうふ七歳なれども。心ざまいと怜悧。五六才の比ようり画を好て。常を父の
側に付りつ。いちご教ざるを。花るるごとに学ぶる。筆力墨ごもとるびくり。
さくねぶふ。女児ゑとりのるひしめれば。親の鍾愛大ろるふぐ。ちくふまくく
旅ゆーて。いくく病ろぐくべ。只よろぐ伝るくて。胸ろるまくくちふりのふ。醫師八
この地に行くるを三人まで。えぶみうえ。薬種を人参熊膽なんど。價値
厭ぐ。療治既に日数と行て。盤纏も大ろるにちひ失ふ行ふ心ちるを
いぶぐもめふぐ。どろうふーて小匙八。いくもとうり果んともうえ。或八瘧疾
ろりともいひ。或八疳積のるとろうとともいあふ。病症定かなるぐ。申分
つくぐと尋思とるふ。鍾馗の繪図八。鬼邪を治ろるはしこの法本草ふ
ええろりとるいぐ。必ずしあるるみるるぐ。小匙が病症おくく物の怪ろそ
めこれ。ろと年来。呉道子。黄筌が筆意ふ倣のて。鍾馗と図をること

その数をもつぶかるゆゑふ故郷ふあり日ハ撞旌とりて名ふほまこと
古人伝神の妙。亜龍雲を起して甘雨をふし。亜馬夜出て芳宜式金
つぶ筆これくふて及ぶとも今丹青をりて丹誠を抽ゐ験もめうべ。
試こふせんやうありとて精進潔斎して神佛を祈念。小匙が忌これ衣の
裏ニ朱を以鍾馗を画ケ。ぬこびその衣式著さるに。小匙いこの夜より
魘ミとて。奇病日ハ逐ゐてもとこりり果こう。申分さこれゐず。微妙つぎ
もこりけりとこふ扨ゐら旅ゐれば人もちふ。かくいこの日来よりゐず費
多くして。盤纏も大ゐこハ盡こう。ちでゐり湯倉をこゐぎてくりゐべ。
生活の仮忌獲べりしふ愁ふ華洛ふ至ゐとゐて。いこゐふに月日式過し。
今又この地へまこりて。杉む樹蔭ハ抄枯れて。女児が奇病此彼と変ゐて
ゐ人ふ苦なりて。漁舎へも赴ゐ。ぜしされがとそ。けして食べ山も空。ゐ腰

腰くなりこふゆ。この渡ハ何をりて。親子ニ人が房浅ゐ贖ふ。とせん
かくせんと夫婦額をけきあハ。つ。うち相潭のニ左をこそも右をこそも。
ちゐ人ふ絶て色。ゆゐの女房ハ名式機白ところ。ぼれて。ゐづのゐゆ。ふ沼
がれなるをんなれば彼と浴合せゐやそ有一夕機白を抱ゐつ。申分
夫婦ニこゐう人ゐらもゐく物ゐこりして生活をくきゐゐゐもゐゐと叮嚀ふ
ゐこ人ゐ。機白笑て眉式顰め。然宜ゐでも日来ゐり。公りとゐく忌人伝ゐ。
一村の蔭一河の流ニ。他生の縁と笑くと式。そもかくもゐて此里ふて生活
ゐ人とゐひ伝ゐり。ゐゐ人吾倅ハ女のゐゆ。男のゐ人男ゐで。汲引せん
伝ゐれば。ゐれゐ良人由ハ縁由を告ゐ。夫婦が心のゐゐ行ハ彼
此を笑ゐ宝ゐ伝ゐ。奉ゐ事ゐ。買賣にゐれゐ。ゐ人ゐ。ゐ人ゐ。ゐ
ゐひゐんや。といゐ人ゐ。と憑ゐ心抱ゐ。ゐる基ハ亜ゐ。商賈ゐ。

るに彩るなど。恵をかくせんとふくめぶ。紹介して、ときいふに。機白はゆるも
のと。平城の舊都なれども。さは風流の好びをする。刀祢達はありとも学えず。
吉野五器の蒔繪。平城圓扇の丹繪のこと恵くるのそいと多う。忽卒なる
ことに付れと。今改の華洛まも稀なるべし。美人をうせず。給りもあるべし。給銀
獲のふべし。これ爰一の捷径なり。給事と嫌ひあるべし。里の少女ホ。物に浙
るひてんやこと。拒果敢くくしたなきけれるべうもあるべし。父はく
とうきんのいまたるも付くんとふ。年青ゆて數息し。紙紫ホ人とるべ付くに。
新羅琴をべ些とうかてるべし付れども。ちべえ来をさるべれば人の師と
なるべし足らべ。されべとて所をも別且ホを捨て。給事ホ系りべと。ホ人べ
機白ちち微笑をさのこ謙退をるべ。藝ち身を助るとこそ世活もいと。
晒布の賃苧績ぐうり人ちうべね世ちうし。さられ剿除もなれ里なるとべ。

頃ホ貴子もはうねるべ。只何となくちべるべ。ものづくべ人もありて。
琴をうくうんとふりのべ。とく集合もまるべ。向の彩ホぬりなる琴あり。それ
借て進ぜんホ聖ちうホひちもの人と信ちうよ勧めつ。その夜良人由八まるのの
越を流ちべ。次の日彼琴を借りて弾さ世ちべ。年青ハ今さらに晴ぐるべ。面
ぶせるる面行ちうべ。かくそべ人の親切ホ。のちほ推辞ぐて。毎日ホ琴を
操持つ。女児小匙ホ組歌を誨ふホ。容止の美るべ。その声も又妙
なれべ。佛の國ホのりをふるの音もかくやとおぼえて。ゆく人耳を側ぶ。
往ホ。ある日由八ハ満面ホ笑をふくこそ。外面より帰ると。女房機白と物蔭へ
指て寄て。霜ホ二階を向上つ。指一示。もの人ハ何とうるべ。彼処の客人ホハ
房浅貸て殿のれども。その懐とうちのけられて。此のちとそもたのしかべ
ちうホ須日。ひらひるる客居ホ逗留しるべ。摂津國天王寺のほとりにかまを

年青と書入れ
鬼九郎由八郎
かゝ産神
きくろう

根深屋
ちんか
おりと
さいもん
ごろう

財主なり。彼刀祢曩ゐ吾倩を呼びて酒を喫せ酒ちなに宴ふ。ゆゑ二階屋にて
毎日ゐ琴を調ふる主の女子とこれをうとこと彼処とさ向へ。これをうべの
面影をうそーより心ねすどひて忘れをゆり蜂始して彼美婦人成獲さ白べ。
辛苦減ハ身ゐ寄く積てもとうさぐらゐ。これ紫米鬼九郎と呼ぶ
天王寺の南ゐ。荒陵山のほとりゐ。きく人よきれるのを今ばをぐ者
せんとそ。仁田細一疋ゐ碎銀一掬を紙ゐ刹れりそえて賜りね。海士ゐ塩焼く事て出ゐ
かほ刀祢又めぐーやはされども人の妻ゐれば容易ハ相譚ぐ。日数を厭ゐ
討果なゐめぐ。只後ゐ待ゐ人妻の女ゐ告ぐ。かりこきりぐ。
と意つ。禄ゐりて殺りゐ。と額をめーて密語ぐ機白ゆくめ。歌ぶ歩
行燈ゐ丁ゐの花を結ぶ。今朝又耳の癖りしかほるゐ。ゆくべ祥ぐ
かけゐた徳つ祢ゆゑひき人ゐすぐ。又彼人もちぐ。傳

標致ゐ貧ゐ夫ゐ伴ゐて。旅ゐ旅ゐ呻吟ゐ。富家の妻となりぬ。
牛を馬ゐ乗ゐ。出世の早道ゐ人ゐ。ちりともかろぐ。ひとりて。
吹痴を求めゐ。後悔そこゐ。ちぐ。ゐ。かくゐ。所ゐ。氣ゐ。晴れ
ゐ。といぶ由八ゐ。これゐ夫婦ゐ。ゐ。ゐ。有一日由八ハ
申ゐ。ゐ。近曾奥福寺の客殿を復覆せられて既ゐ成就せ。ゐ。
蔡穢合天井ゐ。ゐ。重ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。僕汲ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
用ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。申ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
赴ゐ。幸ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

法且繪筆を懐みて。興福寺へ系詣し。彼此と入めぐりぬ。ひよん
べき術もなければ。この日いとぶふに降りて又次の日も彼寺おいめぐれば。
とくをまねぶ亭午ゐ雨ぬきの雨ゐ徴りて割籠をび齋しゐ
湯飯乞ぐやとて。食堂へ入りむきて。湯飯所をさし覗くゐ。ちりえさ
とゐぶしくて。いまぐ物をび かくぎりくれ。屏風一雙あり。申ゐ入れとうて。
法師ゐ數ひこの屏風ゐ入るぐて物をかくせくまうねと問ぶ。法師ゐ
平城ゐ入させる恵師のゐくれぶ京ようたれくれをぶび迎へと。食饌せくれ
どもその人いまぐ定ぶび。これふふ物の員ゐもあふ稀ど。客殿の紙門天井
ゐんどこゐるちりえくふゐくもといふ。そのとき申ゐ入ハ會釋もせびゐ
めぐ。僕この屏風へ恵きてまゐふびべ。といひもめくど。行童ちぐまゐ
硯箱ふめるをしようて。慶しく墨揭ゐるび。懐ゐる墨とり出しつ墨を

含しく。ゐをちち屏風を倒しゐりて。既ゐ画んとする彩ゐ。法師ぢちとび 体を
えて我ハ呆れ我ハ怒ゐ羊ハ申ゐを推禁め羊ハ屏風を引奪めて。異口同音
ハ罵どゐめれこの白徒物ゐ狂ハ欲甚りて無礼く。汝ちらどや本寺ハ藤原
藤足ゐ。ちめ山城國山科ゐ建立ちゐひたるをゐんま法海公。更ゐこの地く
稱しゐひて山階寺と唱ゐつ。又厩坂寺とゐ。則和銅七年ゐ。供養を遂ら
ゐて以来永代不易の霊地たる。七堂伽藍の大剎ゐ。ゐれば上天ゐの宸翰ゐ。
下諸名家の書画ゐ至て。寺宝枚挙ゐ遑あらど。縱食堂の屏風ゐりとも。
市井の俗業ゐ汚さぢんや。鳴呼ゐり。漫ゐりと罵ゐ。申ゐハほゐるびゐ。画
ぢどゐらぶ。ぢゐるゐんいく罵ゐとゐり。と嗟化つ。左の袖を引のびく。
墨を拭ひ去ゐて懐へ挾しゐ殿司の老僧これをゐて。ひとりひゐ撃。嘆し
慶しく法師ぢちを屏風の背へ招化ゐていゐ。今彼人の為体をえくふ

犯人よ似て。犯人よりらど。強て屏風よ画ん人とのあと。嗚呼ある所行よ似うれば。必得とる所あるべ。且袖をるて。筆の墨を拂ひ〻。常人の進止よりらどをづ試とふ。この屏風よ画せ。ろろ〻更よとをえんのそ。り愛たて画師のて。たらぎて追ふさび。世の胡慮よるりぬべ。野夫ども又功者あり。物い秋状よるべらど。と叮嚀よ説諭せば。衆皆有犯とてぢめて曉て。忽ち〻容を更め。申奴よ射ひていの。和殿との屏風よ画んとのとものまうぐ本事をたらざれば。おぼつるなさる許さびたれたらいめんどそ。その画をえざらん也遺憾〻。和殿のをよまるとべるよ。と〻〻画たるといれて。申奴今ふ。聽〻たる気色もあ〻。うけぬりつと。意〻てふそび硯を引ら〻つ。件の屏風を推ひろげ〻。春日野の鹿を画くふ。一ドさび筆を走ちまんが忽ち形をるて。墨執刀墨色思慮の外よ出て。鹿い卧たるあり。走るあり。千態萬態活るが如く。僅半响ばるり且て。一双の屏風。その画全功あり〻〻。

それを見るの者を巻目を驚るさどとらりの色。就中殿司い兵曹小。申奴を稱賛て。斉をすめられ。ちめら〻。和殿のる体。凡人ならどとらひ〻ぶ。ふふまたる名画ありのよ〻の巨勢金岡千枝常則ゆるたらば。當今多くいるがるる人欲抑本貫い何国ありや。名告ら色とい。申奴い依然て。些も匿ど。画の為小緑を辞て。菊池をを去たるはを物語且〻兼俗よ僑居〻ゆひ〻ぶ用ひられど。近曽ての地〻ゆるとい。不幸ふ〻。相識ある人を喪ひ進退究て。今ろ浪親ふ。根深とゆ〻客店ふりとい。事の趣いと哀れよ。ぞそ〻ぶ。衆皆頭よ嗟嘆〻。世よ千里の馬いあるとい。これを知る伯樂ば。翌ゆり當寺へ。ゆきをよ。衆後食誂て。古画の彩色その餘の画図。をて和殿よゆさぬべ。とれい當寺の引当物とて。一封の餞

を賜はりしう申次とれを受収て旅宿へゆく。妻の年青主人由八様白六
けの首尾を物うれば年青が飲びいへばさらく由八夫婦とれを中ノ
とうぶ計策をうりぬとて裏表利のみをとれを飲び妻のいそのの画の
ゐらざるを稱賛し。おん身ちらざるも彼れ寺の蔭を蒙りあのとれい蹟跡
ゆんと遠うらど。翌又彼処へ赴て。花主をとう失ひのうと真実だらく。
常ものあらど歎給りゆく。次の日又奥福寺へ赴んとする小女児
小匙も諸共りゆうんとうの。愛する親のゐうち強面い推も禁ど。平城を
名所古跡多りれども物うんれのの旅ゐらねばとへ。来て日数経たるどっ
大佛ごゆいまざうんをびしのうり彼れ寺の画をうれ初るゆめらざめれい。
小匙をれて。ゆく先坊ゐうん且く留めらくとも。この曛昏ゆ必ゆるびりの
をとゐひしぶ年青ものはをゆえ居。ゆて小匙がをを引て奥福寺へ

しうの殿司ゆ入れて対面し。昨夜喪徒食議して。いろく和殿ゐ画
をべたゐ定りぬ。今ようとうゐ宿へく。速ゐ筆をとりちめゆくとうの。
申次ゆて仰うけゆうりゆひぬ。但ゆ〜まざゐ火誌ゐらんとうらひうびどきゐれ
ものをおく〜ゆりぬとれをゐ旅宿へくとびて狩彼恕ゐ画を好ゐ繪具
るど揃るとゐをき〜とろゆくゆとめへ。殿司うち兵氏たるとれいその
鮮子旅宿へゆるゆるゆべらど。十歳未満の童女ゐれば。ゐぶ寺ゐ止宿
すゆ物ゐ。その彼和殿の側ゐあれね。後具を揃ゆるどゆべ。便宜ゐ
べとゆ。叮嚀ゐ留ゐべ。れさゐ推辞うゆたり。現稱れりのといへども。
旅宿ゐめれば残ゐ〜口をゐ一十日も餉ひぐ〜。たるるゐ寺ゐ在とれい
られ一人ゐも又益ゐり。ゐと彼首のゐゐれば。年青小如此くと告ぐゐも。
両日が間ゐ。由八が詣ゐべゐゐ。その〜とれらの趣をたちゆとゐひ

せでこの日より。親子興福寺に止宿しつ。小児も旅宿にある迄で。食物たらずして。毎日父が画くを見て。そを身のたのしとなしけるが。ちひのかゝ母を慕ひども幼き程に。年青への日より。良人のかへらざるを切なく思ひば。となんかやあるべきと思へども思ひさして。ぜあてものあゆみするに。彼処の吟ち美人向が由八が年みも玉をとすぶら寄りいべき他りおへざるいより巳たれ。すぐ黄金まて来まさんぞ。おちゐて待ちへといふなせん術なくて。両三日を過ごしけるに。有一日由八がいふやう。某けふ川上町へ申されたるに。その寺をえがやとといひて。此寺へ来請し。申奴ねしに対面しいはひ。今愛も恙なし。ある所ふ彼処におまきを画くべき物多かるに。いそぐとは云へど。この月のうちかへらん。人をさし付けよ。訪ぞもあれと宣ひし事の容をそへて。はいづれ寺の兆走よのつまあらぞ。黄金の墓ふとりつれはへば。いと歓しくもといふに慰められて。けふと暮し翌を

あり世が独旅宿の徒然に堪ぞ。ようしくして又廿日ちがひ。こゝ壱也。絶て良人の帰りこずれば。又来るまでに延ばしけるも。由八は冷笑ひて。使せんともさざれば。また々くかくするとこ。彼の今あると。織白に穴稿に向ひ嘆息しつゝいねがたく。またどもいへど。久後の事おほつかなく。おまきに痛くとひられべきを随に。まらんべし。さても申奴ねらん。彼れ寺へ来りあひより。画の料足など夥あつりしが。忽地にそろ驕をて。よからぬ友に誘ひなる。夜木衛街の娼院にいゆかて。何かの君と中らん名ある於女と睦からぞ契りある程に。縁の中などもまさりつゝ。獲たる金も忽地につかひ果ひかるにふ也。あほこりずのに花街にさそひて。痛しや今愛らなる国戸のすまを遍く。その身價さへ枉費ぶ。巳に是と吉たるものあるのを巳て。実話あらんまゝに遇し。かゝる夫ならぞや。からかへも又いねる月より。房幾の貸あれど。人のするをる

おもへど。自身思志なく。ともよしなき密語ハ。年青ハいとゞ呆れ果つゝ物を接ずるに。良人ハ今かほど年すごしたれど。かくまで虚気人にハあらざりしを。されど色ハ尋思の外なるものにて。遊女にとち惑ひを絶てなしとハいひがたし。但小児を囲ふ費ありしといふとも。まうしあらずといへども。されハ物の障碍にて。鬼とし呼行ハたる欲ありてえざれバ。おのづから。今更いひあらそひバ只仮初に彼処へとて小児をおそ宿を出されなハ。絶て七日あまり。音耗もなくて。たゞならねど。いかに付とせん。とゞめかねたるを。とかく商ひにいとゞ迷ひつ。胸ハ忽地にかきくもり細きより濡る諸しげれば。只一間に更ふるかりしもあるべき事ならねど。猛に主人由八を招きつ談合するに。由八眉根をひそめて。仮初ならず四五箇月もかくなしたれバ。親族縁者ならぬ身も件の風声を聞しより。懐たゞしさいふべきもいはねど。さこそ住ならハ

臆みて。かゝる難義になりぬれバ。心の中推量るに誰か痛しと思ハざらん。論より證拠といふことあれバ。機白に御導きして彼処へ赴き。令愛にハ責られずして。彼れ寺に居たまへバ。いかにも攫てゆきたまへ。されバ日も暮るまぢかし。機白もうちうなづきて。翌ハ彼処へ御導きせよ。ようや物をもいひそゞすとも。女子ハ人も思るとも。弱気をとりなほして。夫婦も共に慰れバ。流石きんまの涕なるふ。いと憑しれてちしそ。さて次の日をまちつ。その夜いとゞ長くおぼえて。眠らんとするにもねられぬほど。明るを遅しと起出たれど。人に御導きをたのみ身ハいそぎてせちなるものを。そのひ時を移して。その比及に宿所を出て。元来そぞろなれバ。機白ハ年青を誘引て。奥福寺へといへど。猿沢の池をうち続きつ。彼寺より南元興寺へ赴きて。律道申すといふ画師の処に在せる由を向ふにて

絶ぬるさんぜんとそなたの居ぬいどを木衛衛の妓院をたづねんとて
忙しく元奥寺を立り出るに年青い平城(なるる同)の小匙が看病世話
物をんとも呂ざしにて猿宿よのもとりねて所々の名だよたちん呂機
白がのめまふ彼元奥寺を奥福寺とちのよ良人つてかをらどとゆて
ひちらし妻ならど又機白が後より跟て木衛衛の所へ起れりさるほどよ
申公の好ひ拔とて呂唐よ画よのもとろを委ねつ廿陰を情らうぞ
ありつど奥福寺よ止宿すること廿日よりて大りさい画れ果たり今一
両日が程よい猿宿よ向りて事のね体を年青よ告ちらして欲せ日来の
技然を慰めぐ申と呂のをり忽ち一個の倭子きりまて。めらくしく
申公を呼び出。僕い根深由八が使のりのて行りいちらど志よちらすぐ
るめれば俱しく向れといられたり。くしく出さをゆとて呂唐よいそぐ

りて志られども申公へ物よ動ぬ性なれば強てゆくべたらうを急て志づ使の
ををを向。縁由を殿司へ告て志ぐ身の眼を元小匙い途の絆あり
とて。これをぞ留めて呂ひりて。根深ら宿所よきて向よい主人由八を右の腕を
布めて包ま出居の柱よりられてをり。申公い年青が出も迎へど。撥白さへ
ゆらぬを詳しく呂ひるぐら。あらぐ小剣て寒暖を述。鷲よ忙しく使を
ゆりしい行とやらんいとひりとうとゆ由八を面るげるありちて現
そのゆく某故ゆりて妻を離別しをゆたどりりみてゆ公ぐらとを
らゆ明白よきりさんいひりて呀行るぐらその源をたづねべ身の今改
より起きり妻女のとよをたさぬよて。猜しゆうとゆ申公宅て小藤をすま
言詳よ告られねべひぬゆさいいとも。ぐ女房りる起て和殿夫婦離別
及ぐ音倚よかいて面ぶさ。年青い行迎(由)たりや。年青くと呼びたりを由八

年音
木綿衾
申分を
素ね

急に推ばかりが逼のみか。逼の人か。現に女は水性にて仇なるが多かりし。
今般の起臥にこゝろ得がたきことのありしが。昨夜出て帰りしかど。奥福寺へ
とおもひしが。さあらば。その為倖逐電せしにや。さる疑ひなしと云。桟白女が密夫の
嫉妬して誘出させしならんと疑ひ起りて這奴を鞭つてこそ見んと。悍て右の腕
をおろしける。而後密夫は定めるなれば。その往方がにあるはしらざれども。己が女房を
追ひ出してそれが潔白をあらはさんと思ひ決めて桟白をたゞさんやまてゆひしが某腕を
おろしければ離縁状を写しとらんとて。所詮なれば代りて件の状を写すべし。今般
の往方をば知らねども。こゝに探索めて進らせんと。いひもあへず左の臂をさし伸て硯
の台の紙取よせて墨を揚り。筆るなくたのめど申ぬは理りとも。いひ称て左へあくれば
筆を採らせけるに。而さるとあがらんや和殿の女房が嫉妬をあらはすとも。年青が
操貞くは密夫と奔るべきや。彼は年十六の秋ゆへとて今茲は廿四なるべし。あるに

在りし日は行状もいと宜しかりしが。まの凋落疎しく。いかゞひなくて子とも棄身
と晴して逢りけん。と云は世間に往々あることで。更に離れを恨ん。離別状の代筆は。
許しまじ。とさし戻を硯をあらび推つけて。由八が左右に揮でこそひとつに
おさめなば。男魂あるべけれども又男の意地なり。一旦まうけたる女房を離別
状を写して。とてもの事に。世をはゞかりて。おのづからけ引あへぞかはれけんより男を
出て出家とるよりほかにこそ。しかも引あへぞや。と怒ければ申ぬは今更に推辞
しもえならず。とかくいでいりするならば件の状は写べけれども。己が妻の為に離
別させんは又知らず快からずと。いひて遠く呼ばれしは。ひとと叮嚀に説諭
しそゝや。と写させ月日の下に由八と名書して。きし由八太きに詫びて
彼状を巻納めなどとるに申ぬはまづ小訖がところへとるなりけり。望
又来べきよし約して。やがて奥福寺へ帰りけり。

鍾馗の下

由八も申分が無く紙固送りて舌を吐き右の旒を包し布で忙しく丸捨て離別状をもしひらけ由八の由の字に筆紙添て申の字とし又八の字に筆紙添て父の字とし宛名の所を切捨て年青刀祢と字をあらためひとつの絵としていよいよ桟白へ謀りて良人と示しあはしければ年青を始て元奥ちるを是り出直に木衝衝の妓院にい出れて此彼にて申分をいろいろにつくりて時を移してその日の黄昏に年青はとも成りしが由八は忙しく出逢いに申分ぬしまして逢ひし事を聞ば桟白は悦由あへいつかる奥稲寺に居るなど本衛衝を彼此とした れど彼に罷ありぞいつづくに移りかれのおさきよど喰けば由八は領に嘆息し宿違ざりしも家あるとすり。最後に申分ぬしは嫁はて起りとて未だ支もとし内へは罷りてそ主ずふいられどるもあり。かづ是をとへまへとそ離別の状をとり出せば年青は嫁を取うち発ぞ遣く

るし開見。金ハなくて三行半に書ものぞ良人の手蹟申分と知るべしとぞあ彼者に彼を料面りに如此のことはいひあへず人情に飽ねうられの云状をおくりてくおのれありとくらす由物による妻を損子を棄て彼の所にとの色を犯ひ果は浮生てとの私の名に昔しは八昔海などや思ひ引とあれ遂にそのちかぬるのをもつさて一致の童の跡あり人のうらみしとうわ口説てよくと泣ば桟白はかりして年青が背撥捻口の果よるおりちまれば由八は歯を切て人ふまあそ人にあふが彼人のたろよさ物かるぶに腹はしけれどいかでふかの縁由ありて人の欲に限りあけまで金銭ある限りあり僅の間とのひあずから申分は花街にいひし道の料足をつひ果し剃備銭を債られて昔に随ふ女児を遁して寺にもぞうふ嫁禽をとて縊て赴くに鐵銭一文の路費は毒を懸ふば皿をぞと年青をがある人の側室に賣て身価を此度の路費に来るべし此流に離別の状を

送りおく。今宵その人より。迎の竹輿をうけ給べけるに。年青を遁匿てあり
ぬとて。いろいろ比ゝ。只一下とゞめ理を推て。且罵り。さまゝゝに諫めしかど。
あざけ笑ふて耳もかたぶけず。紙鳶の糸断るゝ如く。奪ひあくまで去て忽ち
往方をしらず。つくゝと尋思るに。狗ほど劣る夫ふそふて。百折千磨の操を
せんより。人ゝ去られて富人の側室ふるゝ物怪の幸。哀しくもあくまで順もとう
ぶけまじ。この道理をくゝ口死てこそまさまでの縁と思ひ絶。今宵の出船まぎれ
うえて。彼ゝざ奴へ赴きまゝと情を被とる詐欺の言葉の尾ふ付く桟台へ申奴
と罵り。或ハ年青を慰つさまゝふとゝらくゝされば旅客の巴峡ふ叫ぶ猿の
声。哀ゞふる悲絶ふ年青ハ去る夜郷ふ来て。良人ふ恵れ子ふ別れ涙ふ賣
まてゝおぶゝ人の側妾婢妾とゝるまゝぶゝ。ゝ果ゝる為命。死んとなれひ
決めて。子ふハひゝ苧車のゝゝあせがゝ乱れそゝけ乱れひ。
ちまでの涙堰あくまでいとで苦ゝ死胸を抓んでよゝそや九年。夫婦が中ふ
子ひとりの恩愛の絆をゝくまで切れまゝ夫のこゝ絶。
恨ゝそもゝひるけまゝゝつゝも武士の女児ふ彼り。二親ゝがら存命て。肥後の
菊地ふ在をれど夫ふつゝハ婦の道踏ゝ比ゝと友々を出て華洛の僑居
ゝふも膝を容あくまゝ。今茲口ゝ入るゝまゝと跡の。奈良ハ捺落の活地獄。嫁ふ
裂まゝ火ふ焼ゝとも。妾女の價ふ身を賣ゝれ。ゝゝ人の国の伽。枕の塵を拂ハ
まんや。人ふ誠のあるゝゝ。この修羅ゝ苦ゝ。ゝのひゝみて又泣ゝ。
ハ圓ゝる目を揺て鼻打ゝ。身の憂ゝとゝるせゝゝ。死んとゝひ定めゝハ。
結まゝゝも。ハん身ゝてゝて死ゝゝ。その崇ハ宿ゝゝる。吾衛夫婦ふ係ゝん。三四十
房浅ゝゝゝ。損ゝゝハ連累の。難義をかけらまゝハ情ゝ。男女の相
生雲で神の恩ゝくゝ。世の殉束とゝひ諦め彼方ざまゝ来ゝゝと流

諭せば由八申真實さらて。桟敷ひいくゐ申ひろるゐ。既ふ夫ふ棄らまて。保人申るゐ女子をうらが家ふ養ひぐさ」さまぐとそこふて那令ふ死まそふ後の崇祟まぐ」怒をおさめ祀を忍び情ろゐね令ありとも。在世てこそ可ゐ子ふ又環會月申ゐんゐん多ひろゐれとそ別いゐんや。枉て被死へ棄りゐと。夫婦さまぐふ賺こらゐる移ふ頼て晴歸をおそけまば。紫采鬼九郎ハ。一挺の竹輿を拉て門つ裡ふ入り。由八ふ對ていふ。曩ふ申必ふ多價と遍与ゐる妾ハこまりやられハ津國の旅宿ふ。鬼九郎といふりのこ。けふ猛ふ有ゐろ。書狀到来ゐるふろて。今夜通宵途をいそぐ」速ふ發るゐこと。てようとぐさふ伴ふ。とくといそぐせば。由八ま婦額を著ゐ。この婦人ふ。さゐる由縁ハひゐゐど且く宿ふてゆべいと不侵ふこそちひゆ。速き縣の人なれが貌族申ゐく知青申ゐ。只いろ遠申ゐん目をのりひゐ。その多ろ

幸ゐのうへ。ひじとのふ鬼九郎うち点ふ。そハいつゐ。まぐ申ゐ」獲ぐ死殺の金ふうえて。ゐぐめんとゐふ宿の花をあゐ死風ふ申吹せハせど。いざゐりとてゐを。まこば年青ハいとぐ疎く。ゐうゐふ改を擡て。この旅宿をえてめてゐんるふ年ハ四十ゐまりふ」て。ゐ黒く。多長低くいと賤げゐるとこゐれが鬼ふそゐくゐ拔ゐて。淺ゐ」といへべうゐ申ゐ。既ふ覺悟ハ究めゐぐら。懇ゐふて死んとせば。忽地ふ禁ゐれて。祀のうへゐる祀を。ゐさらさん且く。ゐ放さんとゐゐくふゐ。騒ぐぐ。涙を拭ひて。由八ま婦ふ辞別。ゐうゐふ多を起と。彼服君ぐ胡國の首途ゐ。ゐとゐまむ人申ゐく。桟敷ふ投らまて。件の竹輿ふ乗ゐば。鬼九郎ハ由八ふと目を流ゐて。莞爾とうち笑ゐ。頭ふ竹輿をいそぐ」つゐゐゐを越て。後ゐ去けゐ。雑ゐまゐん。この紫采鬼九郎ハ津國荒墓のゐとゐふ隠ま。死む光掘ゐるがとゐゐく。藏内を徘徊て。眉目ゐ死ふ女を勾引。室津赤間

なれど一曲の妓院へ賣るゝ年ごろに及びしが。今茲の秋ハ平塚へ赴きしに。
木衒衒へ遊女を賣買しけるにぞ。申みが妻年青が容止世にすぐれ
たる紛なれバ。潜に較計まづ根深由八を欲に誘ひおきて計策を約せ。
おのれ六手をも濡らさで年青を掠奪し。さて由八には別に辛苦銭あたへて
与へて口を塞ぎ。人にしられぬ先にとて。その夜年青を竹輿に乗しめ。
通宵走る程に平城より津國の小坂大坂へ八里あり。此ハ八月のことなり
けれバ。夜も世長くなりそめて。四五里が程さへ只二時に乗走てし。暗明
巓を踰ること。時ハ子二刻なりぬらん。走り行に近ごろ此山路には病狂ふ
豺狼三四頭あり。夜ならで街道に出て人を喰ふと風聞して。徒いたくおそれ
麓の里人にも。暮れてハ背門へ出るものなきに。鬼九郎ハなにとも思ハで
廿四日の事なれバ。月ハまだ出ぬ秋の山。松明の光を御導にして。只管に走る

おりから。左側の篁竹さやさやと戦ぐとおもひし。狼二頭蹶然と走り出て。
轎夫二人が向脛を撗さまに嚙よせバ。吐嗟とばかり叫びもあへずふしまろび
吭を喰裂れ首を並て死にけれバ。鬼九郎これに慌忙ず牙を避て逃んと
する忽地株に跌きて。拿たる松明を取落し。そが上に輾び絡りて倒に
倒れしが。右手を突て起んとする所を。起しも立ず後方より。又一頭の狼走り
来て飛鳥の如く飛かゝり。鬼九郎が眉會より。眉間のあたり只一口に。
滅哩々々と噬砕バ。苦と叫びし一声ハ。この世の別れ闇きより闇きに迷ふ鳥夜
越現積悪の因果覿面毛骨いよだち竹輿の裡に年青ハ出るも出られず
惜からぬ牙も今更に會月のさ冷さと夕の露。今や消ると合掌し念仏してぞ
おりける。案下某生再説申衆ハ由八にそゝのかされて女房年青ハ密夫と。
走りしとのみ思ひしかバ。必竟ともかくもして楽をせず與福寺へ立帰れバ。小路ハ待

つらびて走り出ゆくに蒼々公なれどそ母はかの共よ。この御寺へは来まさぬぞ。
彼処よ孫とてわかなかりしや。母は々と呼びかけて常にわがまと慕ふ子の蚊が
来りていはせる飲と見へば忽地寒る胸をかき抱て笑ひに紛らし。母よ小児
このまでは大人しく母ともいはざりしが。雉が梅でかく猛に里ごころつきけるぞ。
よく物を辨よ母はおん身が母なれば彼はおそ録し変化なるが。假におん身が
母に化てわらはを蒼々さんに喰ひ殺さんと思ひし紙。吾儕に見顕され風を
起し雲に駕り鬼が島へ飛去ぬと賺されて顔うちまもりさては母御はおそろ
しき妖怪にてありし歟妖怪にまれ鬼にまれ頃日絶て逢見ねば恋しと
なつかしくおもひ侍り。遂了てよズと携て著を引よせて項を撫で是は又喰ひし
なし母を見ばやと彼処なる仏堂の屋棟なる尾を見よと指示す鬼尾小児は
向上てあみおそ録しと走りを著する秋の蝉青になく又は袖に素の只一めくの

揺子を捐て走りし母は鬼百合。山の鬼は彼尾よりつかの母おそろしきものの
なれば。けやより弗と思ひ立えて母御もいかな怜悧ものぞ。その子に翌はよき物
をも得せん。とこしらへ生まば。こころ得かにて点頭て走ずし忘まて又捨ず小児は無智の
聖なり。さる程に申刻はその夜殿司に對ひて曩に命ぜられし画も大かた
その功を終てゆへば翌は身の暇をたまはりて退出ゆかんといふ。殿司聞て雲にいひ
かけなくも。いとく和殿を労しより。一山の視著只このよふこそあれ。ちなまて
よりて又労きべきこのあり。いぬる日四天王寺の客僧当寺に止宿し。和殿の
画きし物を見て賞翫大かたならず。この地の所要果てば此人をこちが寺へ
遣しまへ画かすべきものの疑ありと叮嚀に契りて帰りにき。このよし豫て
いひべりしが。これのとのるを守りて後にと思ひつ。然止るはその所を予し
従ひなく。天王寺へ赴んとならば。須奴の書翰を進らすべしといふを。申か

少もあくまで大きふら物ゝび大和も旅ふ少へ。何地へとそろ由ざらん。まつも浮ふハ。
そろ遠くもあらざるに。そもかくも。寓ふ育ふ子ゝ終ん。と諾ひ。殿司も欲
て画料の外ふ路費さへ恵まゝ。猶且申ゆハ。法師原ふ別を告るふ。のく
各残を惜ん。餞別をとるゞふ。この日も此彼ふ時を移ゝて。暮るゝふ。ちう
かゝ。いつまでかくてあるべき。一圓ゝ紙退ゝて。今育ハ由八が宅ふ宿ー。羽ゝろ
旦開ふ啓ゆ。とゞひて。殿司ふ書翰を乞て小匙を携。終ふ奥福寺を
退出つ。門前なる市店ゝ入るふ。棚ふ小児の弄物を。殿安排さるあり
けり。そゞ中ふ。悪鬼の假面あり。小匙ゞ母を慕んと云。こまゝとりて賜さだや
と云ひて。彼鬼の假面を買て。行囊の中ふあさめ。猶て由八が宿所ふ到るふ。
日ハ未ゆ暮さる。由八ゝ。豫て申ゆがけ。又来べきよう云いひしゝ。機白ゝゞ
納内ふ辞ゝて。その身ハ未ゆ出迎へつ。まゝ実ゝ〳〵歓給けり。當下申ゆハ。

奥福寺の須ゆ。ゝて。津国ゝ天王寺へ赴ゝよ。紙由八ふ説ゝ。
月ゞ移つの房殘を残ゝ。取ゞ。又奥福寺ふて法師ゝ。餞別ゝて
移りゝる物もまゝ由八ふ与へゝ。叮嚀ふ別を告ゝ。直ふ天王寺へ赴く
ゞゝ。彼外へ到ゝ。出入も自在なゝ。華洛ふハ。卵ゝ。人も
あるべゝ。家ゝいもて故郷へ。年青がる紙ゝ。書状をあつらへ。
ゝして後ふ浪速へ赴くゞゝ。ゝれハ浪人の車ふ。あるべ。再會実ふ
測ゞゝ。なゞふ。妻も子ふ。和殿の女房を。ゝゞ。ゞゝ。
ゝ苦ゝ〳〵ふゝ。速ふ呼びゆ。ゝ。ゝふ由八ゝ。ゝ。の中ふ冷笑ひ
なゞら。その親切を欣び。ゝ。臥席數ゝ。ゞて申ゆ。紙臥ゝ。ふ。小匙ハ
旅宿ふ及ゝて。母のゝ。ゝを研ゝ。ゝひて。母ゝ。ゝ。ゝ。申ゆハ。件の
假面をゝ匹ゝ。ゝふ驕ゝ。敲つけて睡ゝ。ふ。又もゝ。ゝ目睡ぬ。

さる程ふ由八。その夜鶴ふ桟白ふいふやう。彼紫雲九郎ぬし。四天王寺のうとう。荒墓山の禁ふ処る人とうそ望さるふ申ぬ天王寺ふ赴きて。えゝ彼外ふ在らんあれ夫婦絡ふ環会て。ひぶ伎倆とあらるべ。とれかその崇拝ぶ。これいのふせん。と密語べ。桟白望て眼を睛り。そんやとうとぬとふこそ。り。年閑ふせばうぶ。このうん。この曉ふ彼を生ゝく。途ふそうふ。たゝいが由八うち息ぬ。ひもあうぶこ。般若坂ぶべ越さぶ。と寝及あいさる。公の剣。ぶのびくふ淮絡ゝつ。その夜丑三の比及ふ鞭火ゝて。天のゆるとて申ぬを呼び覚て。京ゝ十里の程るるふ。稗子を携りゆゝべ。此ゝ。とも生立のゝ。とく。せばゆるるんとふ。申ぬ実とゆひて。小匙を呼び起ゝ。遠く物ゝとめて張宿を生ふうさみゝ。ぶ鮮明の月の往方も夜ふるゆ深う。原来ゝゝが起きどひて。時とう恨ゝうん。一里

あうゝもゆく犯ふ。ゆゆ。ゝゝふ。ぶ。とひうどち。ふ匙がゆとうう。さゝぐの物語ゝて孤りゆけば。般若坂へぞさゝる。由八申ぬとゆうゝて。ゝるく打扮。追蒐んとゝてうふゆう。這奴申原八武士とうべ。巻捐ゝく面とうゝれうべ。後日の問答むづとかるべ。いうふせん。とゝるたひふ。申ぬがうう。衣ゝる。鬼の假面を佩とうゝ。これ究竟と衣ゆふ搔う。秋の夜いぶ長刀。鞠偏ゝて腰ふ蹄。桟白門をよく須ぜ。とうひゝて。ゝう生飛ぶゝゝふ。捷経ゝう。般若坂へゝう。援樹ゝの間ふ。ゝを侍ゝて。ゝゝと結るゝふ。申ぬ。とゝるの死女見とゝるてゆけば。左ゝゝ歩果敢とゝべ。ゝゝふ尉ゆて。坂を下らんとゝる。外を。由八ゝ後方ゝう。ゝう蒐て声をゆかけど。申ぬが衣の隅背へゝけて丁と砂。ゝゝゝゝとゝゝを反ゝ。援あゝて戦ふ。既ふ深痍を負ゝべ。進退申自在ゝゝゝど。鬼の假面とりて顔をゝゝ。申八が打扮ふ小匙ハいゝ。鉄ゝ死ゝゝて。

左
般若坂
本蓮坊
小馬之
右
暗闇嶺
十狼
鬼九郎
ちん夜
うハ
小さち
き九郎

あな母は爺の身まし〳〵り。あれやくと泣叫びて父の袂にすがりしが。これさへに
絆となりて磐大刀更に定かならねバ。ふたゝび眉間を礑と砍られて仰さまに臥
贈八由八ハすかさず跳懸て土ながら徹まで三刀四刀。刺も胸許より濆る鮮血で由に
息絶しかバ由八ハ手ばや〳〵に申みが腰を探りて路費の金銭残りなく奪ひ
取りこの女の童を助おかバ後に口をきゝもやせんと逃がさじと血刀を引提て走り
よりて小匙が胸許のひ細く。引よせて刺んとするに忽地小匙が背月より。一道の
赤気立のぼるとみえしが身長ばかりの荘嚴の像。俄然として立あらはれ。
由八を睨ける眼の光ハ星のごとく。鬚髪そら〳〵に逆立ちて三尺の剣を閃かし。
驀直に遮り留れバ由八ハ大きにおそれ。小匙を捨て逃んとすれバ荘嚴ハ猿
臂をさし伸て由八を引摑み大地へ撞と投著しバ一声苦と叫びもあへず土を
掴で絶入けり。時に建治元年。秋八月廿六日青砥左衛門尉藤綱ハ大和へ

巡歴せん為にきのふ六波羅を発足して摂山の驛に一宿し廿六日の朝まだきに
般若坂を踰る程に。道次に砍殺されたる旅客あり。また女兒と思しくて六七才
なる稚子。死骸に携りて叫び泣めり。又その傍に鬼の假面を被ておびたゞしく
打扮たるが血刀を引提て倒れたるものあり。藤綱これを見て馬の足搔を
停め從者等に稚子を勦らせさま〴〵に賺して事の趣を問せれども只
泣のみにて分明ならねバ。その為体を察するに假面を被たるものハ盗賊
なるべし。這奴が一ヶ所も疵を負ずして仆れたるハいぶかし。引起してよと下知
すれバ從者等うけたまはりて。左右より立かゝりて引起を程に由八忽地ヱイー
我にかへりて大きに驚き。あり放て逃んとすれバされバこそとて動かせず
犇くと縛めてその懐を展見るに奪取たりとおぼしき金銭ありけり
一定盗賊のなりとていたく責問に。あえずしてありのまゝに白状けれバ遂に梟首

扨て申め夫婦を陷さる。伎倆のえでめとろうと。ちらもの〻首伏し。
この女童を害せんとまつてるとて。孫て画圖ふてゐる所の種植。忽ち
立あがれ。某を引縄て大地へ投つけるゞ。その〻ちの事をきゞとい。
又申めが懐を展見さるふ。奥福寺の殿司が狼めの封書あり。又小匙が
嘗を探して見るふ。衣の裏ふ種植を画さう。青紙を紙にて嘆息
偽神の妙今ものあり。この種植ハ申めとゆうんが画さるものゝ。可惜
ゆゝしの紙。非今ふ教せーゝ。と只管ふ惜さう。急ふ五十子七郎ホを由八が
宿所へ遣し。その妻桟白を搦捕らして責問ふ首伏とる所。由八ふ相問ど
ゆゝて青紙孫綱ハ。強て平城へ赴さて申めが顛末を奥福寺の殿司ふ問
さゞめ。五十子七郎ホを狼速へ遣して。紫米鬼九郎を搦捕せんとする程よ
閻明越の狼を待せよとて。西三百ゆ前。六波羅へ。彼処へ遣さる。

十郎等。年青を伴ひ。鬼九郎と濡夫等が死骸を拉して。平城へ来る。
一昨の夜。この〻の三人。烏夜坂ふて。狼ふ咬ひ殺されしるゞ。行興ふ来る
女の〻恙ふ。某きのふ。此彼の生所を穿鑿して。ゆゝ一人ハ。紫米鬼九郎
と呼まて。荒墓の不ゆゝふ如る光棍るゞ。又この女ハ。平城ふ逗留せ
旅客の妻なり。その為体。全く勾引されしるゞ如。ゆゝて此彼等
扨て来りねとゆふ。青紙咬てふく敬び。天網漏さゞして鬼九郎ハ猛獣
の為ふ教さる。その女ハ申めが妻なゞ〻とて。ゆゝて呼びて問ふ果して
とまるゞ。年青ハ大ゞめて。由八桟白ふ欺まさるよ。紙ゆゝ〻の碎ハ
受んされども。歎きいやゆゝ良人の枉死ふ。ひとゞ涙の数をひて。共ふ死ん
とゆゝども。小匙を見まゞ今ふ又捨ゆるハ命なり。さる程ふ蔡綱
由八桟白ふ般若坂ふ刑戮して。鬼九郎が首とゆゝふ斬梟さる。又年青が

二親ハ。ゐ存命て。肥後の菊地ふありとヤスみとうて。青砥延森
色二人さーそえて。件の親子を故郷へ送り遣せーゑべ。年青ゑ足拵
某甲。頭ふ蔡綱の恩惠を感謝し。叮嚀ふ両個の雑色を新待し
帰しけゑ。かくて年青ハ尼とるうて。拵郷尼と号と。女児小乳ハ
人とるるまゑふ。画をのくせーゑべ。画名を木蘭といひけり。数百年の
後。家の祇園ふ百合といふ女あり。その母を梶といふ。百合ゑ女児玉藻
ハ。画ふ名あり。この親子。彼梶塚氏遊郭尼木蘭等とその名相似
とり。古人を慕ふて名ゑ名ゑ名ゑふ。よゑ。
玄同陳人批しく道。人おのくく嗜欲同じ
かくぞ。りその嗜むを酷しけゑ。必敗を取るふ至る。庚木申ゆゑ
如き。絶て悪ゑ。只その嗜むふ中庸ゑゑ。禄を辞し漂泊し。刃を

新しくたんでめて休む。況て由ハ鬼九郎等ゑ死。利を嗜ゑく
人を虐。遂ふその身を斃せゑ。善悪邪正その差あり。輪廻
應報一定ゑゑ。ぞ。ゑれども嗜欲の蔽。おのく赤脱を かくし。且
申ゆゑ画ふ妙ある。彫塑を圖しそふを校へど。ゑゑ刃を救ふとうる
ゑ。譬ハ人一芸ある。妻子を養ふふ足るとゑども。脅を把をふ
足らざるゑゑ如し。彼由ハ羊ハ虐耗の鬼狩。人をたのくいのゑ
家を倒を。庚木ハ終南憤死の人狩。生涯志を得ざーて。名を
後ふ埃ゑ。ゑ。を慎めよ。ゑ。紙惰をて。只得ゑくハ道ふより。
徳ふ。ゑ。さて藝ふ遊ん。

青砥藤綱摸稜案巻之五前集大尾

倩の李笠翁ハ博文多藝の人なり。されども傳奇の作をもてその名をあらん。書畫僅まとまつぐ。頗人間の喜怒哀樂或ハ忠臣孝子の行狀或ハ惡棍草賊の出沒今日ものく眼前にまぶるるものハ雜劇のみ。さるゆゑふ小說家傳奇戲曲ふうに云ふ。童稚婦人を樂しまし易しとて予が稗說ハ李園の趣ふ似たり。但この編のみまちまち淫。竊ふ聽五齋が批評ふ倣ふく。漫ふ惜石陶氏が舊序を借まとめ。その趣向を圖畫よせて新增百案嚏碎て悉皆ちが吐とを綴。前集八卷なり。初冬二月五筆をりて先ゝ。書賈の急迫奪ふが如く。兩三頁草されば隨て淨書せ。先兩三卷ふ滿るられハ。剞人前冊の功を報ぜ。この後一下ちびも。藁を更ふ遲ゝ。されども。蠅頭俗體。字ふ字を附ふまを草とるる容易ちず。夜ゝ鄰雞の報ある後ふ。ためて寢ふ床ゝとつくども。日と費まを四十ヶ月やくにして藁を脫し。欠伸してちぶふ。亦復敎ふ行を編左ふ顯しち。辛未仲冬十三日

簑笠漁隱

飯台　曲亭馬琴稿本
葛飾　北齋雷震繪画
浄書　石原知道　岡節亭　鈴木武筍
剞人　櫻木藤吉
○平林堂藏版國字小說數種
鎮西八郎為朝外傳　椿說弓張月　全部五編　二十九卷
青砥藤綱模稜案　後集五卷　未申冬刷出
金次郎地獄沙汰　中本二卷　近刻
馬琴画賛扇數品
文化九年壬申春正月吉日　發販
江戸神田通ゝべ町大坂心斎橋筋唐物町　柏屋半藏　河内屋太助　取次ふ
江戸田所町本所松坂町二丁目　鶴屋金助
平林莊五郎梓